

---

# 戦場体験が問いかける「生存」とナラティブ

— やなせたかしと水木しげるの比較を通じて —

山口 一樹

立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員  
立命館大学国際平和ミュージアム平和教育センターリサーチャー

---

## 1章 はじめに

本稿は、戦場体験を有した漫画家であるやなせたかし（本名：柳瀬崇、生没年：1919～2013年、以下やなせ）と水木しげる（本名：武良茂、生没年：1922～2015年、以下水木）の自伝・自伝的作品を軸に検討し、従軍体験をもつ兵士の戦後におけるナラティブ、つまり語りの構造を考察することを試みる。

戦争体験をめぐる語りについては、銃後か前線か、そして軍隊階級などの違いによる語りの差があげられる。吉田裕氏は軍隊階級の差から生じる戦後における戦争体験の語りの違いを指摘している<sup>1)</sup>。つまりそれは戦争体験共有の不可能性も合意してしよう。しかし同時に注目したいのは、彼らはこうした共有の不可能性を感じながらも体験を語ろうとしたのではないかということである。吉田氏は、「帝国」意識や被害者意識の根深さという問題を孕みつつも「多くの兵士が、戦争の侵略性や加害性への認識を次第に深めていく方向へ向かった。それは、ためらいや逡巡、反発や反動を常に伴ってはいたが、『生きる』という実践を通じた壮大な『学習』過程でもあった」と指摘している<sup>2)</sup>。だが彼らをこうした作業へと導いたのは「学習」ということのみであったのか。むしろ「生き残った」事実と向き合い、「生きる」ことを支え続けるために——あるいは生きていくための一つの戦略として——自己の体験を語ろうとしたのではないか、ということである。

無論、様々な要因から体験を語らない／語り得ない、真実／嘘という問題もまた存在する<sup>3)</sup>。しかしながら、一つの戦略としてこうした体験を自己の誠実さの中において表すことを選んだ人々もまた存在したのであり、同時にそうした残されたものから体験後を生きることの葛藤、それを理解することが重要なのである。

よって本稿はその試みとして従軍経験をもつ漫画家であり、かつ中国戦線と南方戦線という対照的な戦場体験をもつ二人の漫画家の戦場体験をめぐる語りを通じて、そのナラティブを考察したい。それは例えば作家の戦争体験に関する言及はあくまでその当事者の経験を理解することに中心があるといえ<sup>4)</sup>、むしろ本稿のように比較を通じることで語りの差異を示すことができるだろう。また戦争体験と漫画という問題については、いかに漫画というメディアが戦争を語ってきたかが問題であって<sup>5)</sup>、戦場体験をもった漫画家の戦場体験とその影響関係を問うことは壮絶な戦場体験を有した水木を除くとそう多くない<sup>6)</sup>。そして戦場体験の違いはどのように現れ、また試みられたかという比較もまた管見の限り見当たらないし、逆にそうした比較が可能なのは実は水木とやなせなどに限定されてしまうのである<sup>7)</sup>。

したがって本稿は、やなせと水木という、戦場体験を有した二人の漫画家の自伝・自伝的作品を軸に、両者の社会経験を整理しつつ、自己の戦争体験をめぐる語りの構造を通じて、両者のナラティブを試論的に検討する。

## 2章 出征前のやなせたかしと水木しげる

### 1節 出征前のやなせたかし

本章ではそれぞれの出自と出征までの経歴を簡単にまとめておきたい。やなせは知られている通り、絵本『アンパンマン』シリーズや『手のひらを太陽に』作詞、雑誌『詩とメルヘン』編集などを手掛けた人物である。戦後は『月刊高知』編集部などを経て三越百貨店宣伝部に入社し、三越時代に漫画を書き始め、三越を退社して独立した後は、漫画をはじめ、編集者・演出家・作詞家・シナリオライター・絵本作家など様々な活動を行った。

やなせの父・柳瀬清は上海東亜同文書院を卒業している（やなせたかし『人生なんて夢だけど』フレール館、2005年、60頁）。清は、1921年東京朝日新聞支那部へ入社し、翌年特派員として広東に派遣され、1924年に死去した<sup>8)</sup>。そのため、やなせは幼少期を東京で過ごしていたが高知県へと戻り、母の再婚後は叔父夫婦に養育されることとなる。この養父となる叔父・柳瀬寛は、清の兄にあたる人物で、京都府立医学専門学校を卒業し、後に後免町にて内科・小児科の柳瀬医院を開業していた（同上、31・55頁）。

しかし、叔父夫婦のもとで養育された時代について、やなせはすでに養子となっていた弟と分け隔てなく育てられたものの、叔父夫婦との距離感を感じ<sup>9)</sup>、思春期の頃には「伯父夫婦に世話になっているという負い目のようなものがあり、だんだん心が開けなくなってしまった」と述べている（やなせたかし『絶望の隣は希望です！』小学館、2011年、42頁）。また、城東中学4年次に高知高等学校に合格し、後に京都帝国大学へと進学する千尋に対して、やなせは劣等感を感じていた（やなせたかし『アンパンマンの遺書』岩波現代文庫、2013年、16-17頁）。そのため、思春期における家族関係、特に千尋との関係がやなせにとって重要になってくるといえよう（千尋との関係については後述）。

さて、やなせ自身は城東中学をへて東京高等工芸学校の図案科に入学する。この東京高等工芸学校時代について、やなせは「ぼくの生き方、人生の考え

方の基本はすべてこの学校で学んだ」（同上、27頁）とあるように非常に重要な時期といえ、都市モダニズム・自由主義への憧れが強く、かつ自由主義的な空気を摂取した時期であった<sup>10)</sup>。やなせは「ぼくは西田哲学とかカント、ヘーゲル、ショーペンハウエルなどという高邁な本はたったの一頁も読まなかった」し、「通俗が性に合っている」（同上、40頁）と述べている。こうした点を踏まえれば、そこには都市モダニズム・自由主義的なもの、つまりある種の軽薄さ・通俗的さというものへのあこがれが強くみられた。そしてこうした感覚は、なかば京都市立大へと進学し、インテリ足り得る千尋への裏返し of 劣等感でもあったと考えられるのである。

### 2節 出征前の水木しげる

次に、水木について整理しよう。水木は知られる通り、幼少期を境港で過ごし、高等小学校卒業後は大阪に出て、職を転々としつつ、東京美術学校入学を志し、入学に必要な中等学校卒業資格を得るため、色々な学校に通う。そしてラバウル方面へ出征して戦地にて左腕を失い、帰国後は武蔵野美術学校に通うも、また仕事を転々とし、紙芝居作家や貸本漫画家を経て『ガロ』にて商業デビューし、『週刊少年マガジン』で連載を始めるようになって以降、人気漫画家として成功を収めるようになる漫画家である。

水木は、自身の幼少期について、ガキ大将気質ながら画才に恵まれていたことや、またのんのんばあ（景山ふさ）と交流の中で神秘的なものにも視線をもつに至ったことを描写している（水木しげる『ねばけ人生』ちくま文庫、1999年、19-61頁）。その後、成績不良であった水木自身は高等小学校に入り、卒業後は大阪へ出て職を転々とする事となる（同上、62-71頁）。その中で水木自身は「絵で飯が食えたらなあ、という思いがだんだんと強まり、東京美術学校への受験資格を得るために学校も転々とする（水木しげる『水木サンのお幸福論』角川文庫、2007年、68頁）。

この時期は戦時色が濃厚となる中であり、『出征すれば間違いなく死ぬ』と覚悟していた。死ぬのは恐ろしい。ショーペンハウエルやニーチェなどの哲

学書を乱読し、聖書も読んだ。大いに感銘を受けたものの、死の恐怖は超越できない。哲学書以外にも、河合栄治郎が書いた青年のための読書案内を参考に、膨大な本を読みあさった」（同上、76頁）と回想するように、戦時下で「死」が現実化する中で「読書」へと向かっていった。その表れが「出征前手記」（水木しげる・荒俣宏『戦争と読書』角川新書、2015年）であろう。

この「出征前手記」は、荒俣宏氏が述べているように「文体は、きわめて内省的、あるいは哲学的な独白になっており、苦悩する心情を素直に吐露」しているものである（同上、3頁）。例えば手記には「読書は吾を救ふてくれた。世に文字なかりせば吾は今頃如何なるものとなつていたか。思えば読書は恩人である。教師である。吾に於ては、正に唯一の教師であつた。否、教師でありつゝある。吾はもつと／＼よくならねばならぬ。それには、常に十字架のような心を持つことが必要だ」（同上、57頁）とあるように、「読書」という行為は重要な意味をもっていた。その意味では、水木には「死」と向き合う内省的営為として「読書」という行為があったといってもよいだろう。

以上のように、水木にはまず幼少期からの「死」への視線があったゆえに、戦時色が色濃くなる中で「死」と向き合う内省的営為としての「読書」へと向かわせたといえる。そしてこうした出征前の水木にとっては内省的なレベルでの「死」への向き合いが重要であったといえよう。

### 3章 やなせたかしと水木しげるの戦場体験

#### ——中国戦線と南方戦線——

#### 1節 やなせたかしの戦場体験

本章では、やなせと水木の戦場体験について論じていく。やなせは徴兵検査にて第一乙種合格となり、西部第73部隊に入営する（やなせたかし『ぼくは戦争は大きらい』小学館、2013年、8-12頁）。やなせによると、部隊では馬部隊に配属され、班長の当番兵を務め、そして入隊から数ヵ月後に幹部候補

生試験を受け、乙種幹部候補生合格、そして後に伍長となり大隊本部の暗号班に配属されたという（同上、19-33頁）。そして中国に派遣されると、上海へ行き、そこから福州へ上陸、その後再び上海へ行軍し、その最中に終戦を迎えることとなる。このやなせが所属したという西部第73部隊は福岡県小倉にあった野戦重砲兵第6連隊補充隊であるが、同部隊の戦歴はやなせのいう戦歴と異なっているため、おそらく同じ小倉に駐屯していた野戦重砲兵第5連隊補充隊であって、同部隊をもとに編成される野戦重砲兵第13連隊から分離し、独立混成第62旅団<sup>11)</sup>に所属することとなる独立野戦重砲兵第10大隊が最終所属部隊であったと考えられる<sup>12)</sup>。

さて、やなせの軍隊生活はどうであったのか。これについてやなせは「そんなこんなでどうやら軍隊生活に馴れたし、いつのまにかぼくは精神の根底から叩きなおされ」たとし（前掲『アンパンマンの遺書』57頁）、また「ぼくには、環境によって変化するカメレオン体質の軽薄なお調子者のところがあるみたいです」（前掲『人生なんて夢だけど』94頁）というように、軍隊生活に適合していったと述べている。

次にやなせの戦場体験である中国戦線について確認する。やなせが参加する1944年の福州上陸作戦は、大本営海軍部がアメリカ軍は南西諸島または台湾を占領して中国大陸に進出する可能性を、また陸軍部も福建省沿岸に潜水艦基地があるという情報から福建省方面の作戦を考慮していたことによるものであった。そのため陸海軍は、中央協定を結び、米軍の上陸企図を封殺し、沿岸海上交通ならびに中継基地確保を目的として浙東作戦が実行される。その際に動員されたのが、内地で編成された独立混成第62旅団であった。この作戦は、1944年7月に決行が延期された後、同年9～10月に実施され、福州を占領する<sup>13)</sup>。

上記の作戦により、福州に上陸し、また同地に駐屯することとなった当時のやなせは暗号班の所属であったという。そして仕事自体は少なく、「しかも、ぼくは班長なので仕事はほとんど部下に任せておけば」よかったため、「宣撫班の仕事を手伝うことに

なり]、「ぼくは絵が得意ですから、大きな模造紙に絵を描いて、紙芝居をつく」ったと回顧している(前掲『ぼくは戦争は大きらい』61-62頁)。

この作成された紙芝居をやなせは「双生譚」(あるいは「双生児物語」「双子ものがたり」など)とよんでいる。そのあらすじは、別々に暮らしていた双子がお互いを兄弟と知らずに戦うが、相手を殴れば自分にもその痛みがくるというもので、互いが兄弟であり、相手を倒すと自分も滅びるということに気付くというものであり、それは「日本と中国は双子の関係であって、この2つの国が仲良くしなければ、東亜の平和はない、という説話」だった(前掲『絶望の隣は希望です!』71頁)。しかし、この作成した紙芝居を上演するとまったく笑うような場面ではないのに満場大笑となり、通訳が適当に訳していたのではないかと疑ったものの、中国語がわからず、「これにはまいりました」と回想している(前掲『ぼくは戦争は大きらい』65-66頁)。

そして、やなせの部隊は福州から上海へと行軍することになるが、やなせが語る唯一の戦闘体験もこの時のものである。この行軍における戦闘について、やなせは「あの戦闘で5、6人は死んだと思います」と回想している(同上、74-80頁)。この体験は、やなせにも命の危険があったといってもよいはずながら、「激戦地で大変な思いをしたみなさんからすれば「なんだ、本当の戦争はこんなものじゃなかった」とおしかりを受けるかもしれません」(同上、3頁)、または「ぼくが兵隊時代のことに今まで一度も触れなかったのは、ある種の恥ずかしさのためである」(前掲『アンパンマンの遺書』67頁)と述べており、「うしろめたさ」が語られているのである。つまり、激戦地ではなかったゆえの「うしろめたさ」である。こうした「うしろめたさ」こそが、やなせの戦後における語りの重要な核であったと考えられる。

## 2節 水木しげるの戦場体験

水木については、自伝および自伝的作品でも描かれており、またこの間の経歴についてすでに様々に言及されているので、簡単にまとめつつ重要な点に

のみ言及する。水木は徴兵検査で乙種合格となり、歩兵第121連隊に入営、後に歩兵第136連隊に転属。そして外地派遣でニューブリテン島ココボにて岐阜・歩兵第229連隊所属となって、ラバウルに送られ、そこからズンゲンに行くこととなる。そして空爆によって左腕を喪失し、野戦病院へと移り、療養中に終戦を迎える(前掲『戦争と読書』所収の年表参照)。

水木の重要な戦場体験としては、「敗走記」として後に漫画に描かれるバイエンからの「敗走」である。ズンゲンにいた水木はバイエンに派遣され、そして分哨にあたっていたところ、敵襲で分隊は全滅し、水木のみ生き残り、襲撃を受けつつも帰還する。しかし中隊長からは「なぜ、死なずに逃げたのか」といわれ、その言葉に茫然とした水木に中隊長は「死に場所は見つけてやるぞ」とつげられたという(前掲『水木サンの幸福論』96頁)。そしてこの「敗走」とその顛末は、「規律と命令が金科玉条の軍隊でも、私はぼんやりとした不真面目な兵隊」(同上、79頁)だった水木ですら「それでも、五日間の命がけの逃避行のあとは虚無的な気分が襲ってくるがあった」(同上、97頁)と回想している。そして、この帰還の後、マラリアを発症し、その最中に爆撃で左腕に出血多量の重傷を負い、左腕の切断手術を受けるなど、再び命の危機にさらされることとなる(同上、97-100頁)。

また、水木の戦場体験を考える上でもう一つ重要なのが「総員玉砕せよ!」で描くことになるズンゲン玉砕である。当時、サイパン、ペリリューなどへの上陸で、連合軍がフィリピンあるいは日本本土を狙って進攻すると日本軍側は考え、その中で孤立し、戦略的価値を失うラバウルをいかに戦局に寄与させるかという課題が生じ、これに対して方面軍司令官である今村均は積極的策動ならびに各種の欺瞞諸施策を打ち出した<sup>14)</sup>。その中で、死守を命じられたズンゲンに派遣された部隊(成瀬支隊)はオーストラリア軍の猛攻の前に総攻撃を執行する。ズンゲンの部隊は「全員玉砕」したと大本営に伝えられたが、玉砕した部隊とは別に死守を遊撃戦と解して離隊した将兵(児玉中隊)が生き残ったため、司令部から

厳しい追及を受け、自決に追い込まれる者も現れる事態となり、「二度目の玉砕」が予定されつつも、その後は戦闘もなく終戦を迎えた事件である。水木は同じ部隊ではあったものの、バイエンからの帰還後に左腕喪失の重傷を負って後方に移っており、また「二度目の玉砕」も後に聞いたものであった<sup>15)</sup>。

この事件は、死の淵をさまよった水木にとって重大であったと考えられる。それは敵兵の遺体が散乱する場所に戦友とともに行き、そこで靴やお金を拾い、戻ったところで古参兵に叱られるエピソードである。このエピソードについて水木は次のように続けている。

頭蓋骨は大きく若々しかった。気の毒といえば気の毒な気もした。しかし、かわいそうという気は少ししかしない。よく考えてみると、我々も間もなく同じ姿になるのかもしれないからだ。敵のことを“敵サン”というが、よくいったもので、同じようにガイコツになるという意味では敵も“トモダチ”なのだ。(水木しげる『水木しげるのラバウル戦記』ちくま文庫、1997年、74頁)

いふなれば、それは自身もまたガイコツ、つまり死と“トモダチ”になるということでもあり、もう一人の自分としての戦死者への視線につながる発想があったといえよう。そしてそれが、バイエン敗走によって壮絶な経験をし、またマラリアと爆撃によって死の淵をさまよった水木が後に「総員玉砕せよ！」で自分に降りかかったかもしれない玉砕を描くことになる背景であったろう<sup>16)</sup>。水木が「戦後二十年くらいは他人に同情しなかったんですよ。戦争で死んだ人間が一番かわいそうと思っていましたからね<sup>17)</sup>」と述べていたのは、まさに上述の壮絶な体験ゆえであろう。そして戦後には水木自身の体験を描いた「ラバウル戦記」を試みるのは、いふなれば自己の体験を問う試みであった。しかし平林重雄氏は、戦後に水木が自身の体験を描いた「ラバウル戦記」について「自らの戦争体験を漫画化する作業には入っていない」、また「当時戦死した戦友

に対し自分が生き残った事への後ろめたさがあった」と指摘しており<sup>18)</sup>、自己の体験を語るための苦闘があったといえよう。

## 4章 戦後におけるやなせたかしと水木しげるの戦場体験の語り

### 1節 やなせたかしと残影としての戦場体験

戦後、漫画家なるやなせの漫画家としての位置づけについては、紙幅の都合上省くが、簡潔に言えば戦前来の漫画の伝統を引き継いだものであり<sup>19)</sup>、手塚治虫に代表されるストーリー漫画によって、おき去られたと指摘されている<sup>20)</sup>。実際、やなせも手塚治虫の出現で居場所を見つけにくくなったと述べている(前掲『絶望の隣は希望です!』106頁)。

そうしたやなせの転換期が週刊朝日マンガ賞を受賞する1967年の「ボオ氏」であり、漫画家としての作風を確立し、そして絵本の世界へ移っていく<sup>21)</sup>。また1969年1～12月には雑誌『PHP』にて短編童話シリーズを連載する<sup>22)</sup>。この時期の仕事についてやなせは、一つの形をとりはじめていたと評価している(前掲『アンパンマンの遺書』166頁)。この短編童話シリーズは、今に知られるアンパンマンの原点的作品が登場することでも有名であるが、ここで注目したいのは同シリーズで掲載された「風の歌」である。やなせは「風の歌」について次のように述べている。

私の父は朝日新聞社の上海特派記者で、上海で死にましたが、「東亜の存立と日中の友好は双生の関係にある」というのが信念であったようです。この双生という言葉が中学時代の私の心にしみついて「双生児物語」という話を聞いたことがあります。それをおもいだして、おもいきり圧縮したものです。(やなせたかし『十二の真珠』復刊ドットコム、2012年、126頁)

また、やなせは「海彦、山彦みたいな双子」が殴

り合う話とも述べており（「やなせたかし」『時代の証言者（漫画）』読売新聞社、2005年、54頁）、そもそも「風の歌」のオリジナルである戦中の紙芝居は日本神話の海幸・山幸をモチーフとして、東亜同文書院出身であった清の言葉を意識したものであった。ここで注目すべきは、これが海幸・山幸をモチーフにしていること、また自己の存在が他者の存在によって成立する鏡像の関係にあることである。この物語の海幸・山幸的存在に比類される存在がある。やなせは「おとうと物語」（1977年）において「そして二歳下の弟には／千尋の海という意味で／千尋と名づけた／崇と千尋／山と海／山彦と海彦<sup>23)</sup>」と綴っている。つまり、やなせと弟の千尋である。この相即不離の双子がやなせと千尋に比類し得るであるならば、双子の死をもって終わる「風の歌」は、自己と対比される千尋の戦死と関わろう。そしてこのリバイバル自体が、むしろ死者である千尋がやなせの鏡像として再び現れたともいえ、またそれは「33回忌」に向かうにつれて意識されていたと考えられる。

## 2節 水木しげるの自伝的作品と戦場体験

水木は帰国後、武蔵野美術学校に通うも、また仕事を転々とし、神戸で「水木荘」の大家になった頃に紙芝居作家となる。紙芝居が廃れるようになるとアパートをたたんで上京し、貸本漫画家へ転進するが貧乏生活を強いられる。その中において1964年に漫画雑誌『ガロ』で商業誌デビューし、『週刊少年マガジン』で連載を始めるようになって以降、人気漫画家として成功を収めるようになる。

それは、水木にとっては自己の壮絶な体験を相対化し得る段階に入ったということになる。この点は、平林氏や四方田犬彦氏も1965年のギャグ戦記『ゴマスリ二等兵』前後より独自の戦場体験・戦争への語りを確立し始める時期、あるいはそれまでの戦記路線から諷刺ユーモア路線への「転換期」と評価している<sup>24)</sup>。そして水木の自身の戦場体験談は、「にがい朝食」（1969年）をへて、「敗走記」（1970年）、「総員玉砕せよ！」（1973年）につながっていくとされている<sup>25)</sup>。また「総員玉砕せよ！」以降、

自己の体験の相対化を経て余裕をもって自己の体験を漫画化することができるようになったといわれている<sup>26)</sup>。

水木における戦場体験の語りについては、戦後直後から紙芝居的形式による「ラバウル戦記」や貸本漫画家時代に行った戦記物執筆などの試みがあったものの、貧困の中で壮絶な経験を心中に秘めながらも戦争を表現できる視座を持ち得なかったために途絶するが、「総員玉砕せよ！」ではじめてみずからの物語として描けるようになると指摘されている<sup>27)</sup>。それは「少年たちは花々しいガダルカナル戦あたりまでしか読んでくれないのだ。だから本があるていど売れるためには戦争肯定的にならざるを得ない。自分の思ったことを書いて売れるなんてマンガはソナナもんじゃない<sup>28)</sup>」という言葉に現れている通り、実際の体験や戦場と現実での人気・売り上げとの間で苦悩していたと考えられよう。

それでも、はじめてみずからの物語として描けるようになるといわれる「総員玉砕せよ！」は、1970年ごろに注文はあったものの構想に悩み、そして多忙のために、その完成には3年もかかったという作品であった<sup>29)</sup>。この作品は、知られる通り、自身が所属した部隊に降りかかったズンゲン玉砕をテーマに、もう一人の自分である作中の丸山二等兵に幻の「二度目の玉砕」を体験させた作品である。水木が「この「総員玉砕せよ！」という物語は、九十パーセントは事実です<sup>30)</sup>」という表現するあたりに、まさに自己の体験に対する感情と「事実性」との関係を示しているといえよう。

こうして、四方田氏や平林氏の指摘を踏まえれば、「ラバウル戦記」において途絶した自己体験を記録する試みは、貸本漫画家時代の戦記物執筆を経て、「事実」と体験とをすり合わせて「物語」に昇華させようと試みた「総員玉砕せよ！」として結実し、そして自伝的昭和史としての『コミック昭和史』につながっていったといえるだろう<sup>31)</sup>。

## 5章 戦場体験から問われる「生存」と自己の語り方

### 1節 「比較」と「うしろめたさ」

#### ——ネガティブに語るやなせたかし——

本章では、両者の語りの構造を検討する。まず、やなせの語りにおいて重要なのは、常に他者との比較の中で自身（の「劣位」）を叙述することである。それは「劣等生<sup>32)</sup>」という自己規定などがそうである。また自伝的詩文集としての性格をもつ『ぼくと詩と絵と人生と』（1975年）において優秀な弟が生き残った方が良かったという思いを綴り<sup>33)</sup>、また一方で「生き残ったぼくは何をすればいい？しばらくは敗戦ぼけみたいになり、茫然と暮らしました」（前掲『人生なんて夢だけど』96頁）と回想しているように、弟に対する劣等感と喪失感が複雑に絡んでいた。

こうした千尋との関係は、終戦から数えて33回忌に近づく段階において、より意識されたと考えられる<sup>34)</sup>。終戦から数えて33回忌になるのは1977年であるが、1975年に前述の『ぼくと詩と絵と人生と』が出版され、1977年には雑誌『ホームキンダー』4月号から9月号にかけて、幼少期から千尋の戦死までを綴った詩文である「おとうと物語」が連載される。しかも千尋の戦死から数えて33回忌にあたる1976年の前後でもある。実際、「おとうと物語」の連載の終わりに際して、やなせは「非常に個人的な我がままな連載で貴重な紙面を費やしたことをお詫びします。弟のことを急にかきたくなってしまったのです」（やなせたかし「墓前で」『ホームキンダー』1977年9月号、フレーベル館、61頁）と記しており、私的追悼の側面が強いものであった。

またやなせ自身が千尋を語る際、「特攻」に行くと叙述する<sup>35)</sup>。しかし門田隆将氏の調査によると、千尋は駆逐艦・具竹の対潜探知室分隊士だったという<sup>36)</sup>。これについて門田氏は、千尋が従事した対潜任務室の任務は船底に近く生存の可能性が低いこと、またやなせが千尋と会った際に特殊な任務ということは聞かされたために特攻兵器である「回天」の任務だと考えたのではないかとしている<sup>37)</sup>。こうした指摘はおそらくその通りで、様々な記憶や

思いが混ざり、こうした思い込みに至ったと考えられる。

しかし、なぜこうした思い込みが生じたのか。おそらく次のことも考えられるだろう。すなわち、やなせの語りに通底する「うしろめたさ」において、死者あるいは自分以上の壮絶な体験をした者には「意味性」が付与されなければならない。それは常に他者との比較において自身の劣位を語ることで自己の置き場を確保しているのであれば、死者に対しては「生者」としての優位性を放棄しなければならない。であるならば、「なにが壮烈／なにが戦闘／弟は戦場へ向う輸送船ごと／なんにもせずに撃沈されたのだ<sup>38)</sup>」という思いゆえに、なおのこと千尋の戦死には「特攻」のような、より強い意味を付与せざるを得なかったと考えられるのである。

### 2節 「もう一人の自分」たる戦死者との対峙

#### ——肯定を明かす水木しげる——

水木の語りの構造・戦略において重要といえるのは、3章2節でも見てきたように「もう一人の自分」である戦死者との対峙であろう。水木は「ぼくは戦記物をかくとわけのわからない怒りがこみ上げてきて仕方がない。多分戦死者の霊がそうさせるのではないかと思う<sup>39)</sup>」と述べ、また「自作の劇画や漫画の中で、最も愛着深い作品は何かと聞かれれば、『総員玉砕せよ！』と答える。ラバウルでの体験をもとに描いた戦記ものだが、勇ましい話ではない。誰に看取られることもなく、誰に語ることもできずに死んでいき、そして忘れられていった若者の物語だ」（前掲『水木サンのお幸福論』104頁）と回想する。それは、先述の平林氏の戦死者への「うしろめたさ」という指摘をふまえれば<sup>40)</sup>、戦死者と入れ替え可能である自分が今・ここに生きていることへの苦悩であったといえよう。

そしてこうした「最も愛着深い作品」として挙げる「総員玉砕せよ！」に対して、「九十パーセントは事実」と述べるのは、ともすれば画家を志望したこともあったゆえに「写実」への志向性が強かったゆえにともいえようが、この不条理自体が「リアル」であり、そうでなければならないということも

含意していたからといえよう。それからすれば、戦死者にある種の「意味性」を付与しえないし、してはならないともいい得るだろう。後に「私、戦後二十年くらいは他人に同情しなかったんですよ。戦争で死んだ人間が一番かわいそうと思っていましたからね<sup>41)</sup>」と語り、しかし「戦友が死んだ所に自分一人元気で来るとですなあ、愉快になるんですよ<sup>42)</sup>」とも語ることも関わってくるだろう。それは、不条理である戦場から帰還し、生き残ってしまったゆえに今・ここにある「私の生」を肯定（あるいは証明）しなければならないからである。それゆえに究極の平等ゆえに誰もが戦死者となり得る不条理な戦場での、あり得た戦死をもう一人の自分に体験させることで、不条理ゆえにからくも戦場から帰還したことを肯定する試みに至ったといえるのである。そうした肯定を可能としたゆえに、ついに「愉快」になれたと考えられるのである。

## 6章 おわりにかえて

本稿をおえるにあたって二人の戦場体験をめぐるナラティブについてまとめたい。第一に出征までの経験として、やなせにおいては千尋や家族との関係、水木においては死と向き合うための読書経験といった内省的営為が重要であった。第二に、二人の北と南の戦場での対照的な体験は、やなせにおいては「うしろめたさ」を、逆に水木には自己の体験を問わせる苦悩を抱えさせることとなった。そして戦後において、やなせは弟との関係においてある種の「意味性」を、水木は自己と入れ替え可能であった戦死者たちを通じて「生きる私」の優位性と肯定を語ったといえるのである。

その意味では、やなせの語りは自己の体験を弟との関係に収斂させつつ、弟へのレクイエムとして「意味性」を、逆に水木の語りは「事実」つまり「リアルさ」をもって不条理である戦場（そして自己ともう一人の自己の体験）を描き、そして「物語」へと昇華させることで自己の生を肯定するとともに語ろうとしたといえるだろう。こうした両者の

体験は対照的であり、それゆえに体験共有の不可能性が含意されているものの、それでも生き残った自己を生かしめる一つの戦略として、自己の戦場体験を語り、また表現したといえるのである。

### 【付記】

・本稿は2018年12月13日開催のメディア資料研究会での報告を基に執筆した。当日参加された皆様にはお礼申し上げます。

※本研究はJSPS 科研費 21K12860 の助成を受けたものである。

### 【注】

- 1) 吉田裕『兵士たちの戦後史』岩波書店、2011年、80-82頁。
- 2) 同上、289頁。
- 3) 真実／嘘の問題については、一ノ瀬俊也氏が『戦艦武蔵』（中公新書、2016年）においてこの二元論による判定を批判する。これはその通りである。しかし同時に体験の共有不可能性ゆえに、真実／嘘を超えて生きていくための救いとして体験を語ったのではないか、という点もまた本稿は重視したい。
- 4) こうした研究は多くあるだろうが、紙幅の都合上、佐藤静雄「個的体験から全体へ」（『民主文学』418号、2000年）、小林瑞乃「『記憶』を語るということ」（『年報日本現代史』24号、2019年）などをさしあたりあげておく。
- 5) 例えば、夏目房之介『マンガと『戦争』』（講談社現代新書、1997年）、エルダド・ナカル「天国から地獄へ」（『哲学』慶應義塾大学、117号、2007年）など。
- 6) 戦中派としての水木しげると漫画の関係については、四方田犬彦「戦中派水木しげると『ユリイカ』」（第37巻10号、2005年）、水木しげるとの戦記物については平林重雄「水木しげると戦争漫画（増補改訂版）」（同上）、本間光徳「水木しげるとの戦い」（『日本研究センター教育研究年報』8号、2019年）がある。なお今回比較の対象とするやなせたかしについては管見のかぎり見当たらなかった。
- 7) そもそも自己の戦場体験を表現し得た漫画家というのは、そう多くはなかった。確かに『ロボット三等兵』の前谷惟光（『前谷惟光』『20世紀日本人名事典 そ〜わ』日外アソシエーツ、2004年、2286頁）、漫画界の戦後派三羽鳥と呼ばれ中国戦線に出征した経験を持つ加藤芳郎や横山泰三、ビルマ戦線に報道班員として従軍した荻原賢次がおり（『加藤芳郎』『20世紀日本人名事典 あ〜せ』日外アソシエーツ、2004年、713頁。「荻原賢次」同上、583頁。「横山泰三」前掲『20世紀日本人名事典 そ〜わ』716頁）、戦場体験を持つ漫画家は間違いなく存在した。だが、基本的に戦場経験というのは、基本的には大正生まれの人々が経験したものであった。つまり、戦前からの漫画・漫画家は戦後漫画の傍流に位置づかざるを得なかった人々であり、漫画家としては非主流派に属するか他分野への「転戦」、または退場を余儀なく



- されたし、そしてその表現を可能とする場を手に入れることができたかが問題となるだろう。
- 8) 1924年5月18日付「柳瀬清君広東にて死去」(『大阪朝日新聞』朝刊)の略歴参照。
  - 9) また小学校を卒業するころから中学生にかけて相当危険な精神状態となり、また自殺未遂や家出未遂をしたことがあるという(前掲『人生なんて夢だけど』56-59頁)。
  - 10) 大正末期から戦前期にかけて身体化したであろうさまざまな要素は看過できないと指摘されている(倉持佳代子・吉村和真「『漫画家・やなせたかし』の履歴書」『ユリイカ』45巻10号、2013年、233頁)。
  - 11) 「アジア歴グロッサリー 公文書に見る終戦—復員・引揚の記録—」中の「独立混成第62旅団(操)」<https://www.jacar.go.jp/glossary/term/0100-0040-0080-0010-0010-0040-0030.html>、最終閲覧日:2021年9月8日)。なお、やなせたかし『やなせたかしおとうものがたり』(フレーベル館、2014年、34頁)に「ちいさい木札」という作品で「昭和十八年晩春／福州から温州を経て上海まで／ぼくはひとりの兵隊として／決死の行軍をつづけていた」とある(なお、／は詩文の改行を示す。以下同様)。これについては、独立混成第62旅団が1945年5月に上海付近へと移動していることから考えて、1943年という記憶違いがあるものの、晩春ということで旅団の移動時期と符合する。また付言すると、初出の『ホームキンダー』(1977年9月号)および「おとうと物語」を再録した『さびしすぎるよ銀河系』(サンリオ、1978年)では「昭和二十一年晩春」とあり、後に2007年に刊行された『やなせたかし全詩集』において「昭和十八年晩春」と変えられ、前掲『やなせたかしおとうものがたり』でも2007年の修正が引き継がれている。
  - 12) 「中支那方面部隊略歴(その3)／分割5」(JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C12122441600、中支那方面部隊略歴(その3)(防衛省防衛研究所)9-11画像)<https://www.jacar.archives.go.jp/das/image-j/C12122441600>、最終閲覧日:2021年9月8日。『兵旅の賦』(2巻、北部九州郷土部隊史料保存会、1978年、448頁)には、野戦重砲兵第5連隊補充隊は西部第72部隊、同第6連隊補充隊は西部第73部隊で動員日はともに1944年7月29日(544頁)。前者が同第13連隊に、後者が同第54連隊に再編される。
  - 13) 防衛庁防衛研究所戦史室編『戦史叢書 大本営海軍部・連合艦隊〈6〉』朝雲新聞社、1971年、381-386頁。
  - 14) 防衛庁防衛研究所戦史室編『戦史叢書 南太平洋陸軍作戦〈5〉』朝雲新聞社、1975年、321頁。
  - 15) 四方田前掲論文、62頁。
  - 16) 同上、61頁。
  - 17) 足立倫行「解説」水木しげる『総員玉砕せよ!』講談社漫画文庫、1995年、363頁。書き下ろし版は、講談社、1973年出版。
  - 18) 平林前掲論文、77頁。また、1995年8月7日付「水木しげるの戦争」(『朝日新聞』朝刊)のインタビューにおいて、記者の「『ガロ』には、戦記ものはほとんどかかれてないでしょう」という問いかけに対して『ガロ』編集長で青林堂社長であった長井勝一は「『白い旗』だけです。このころはまだ水木さん、血の気が多いね。無念の思いが生々しく出てる」とも述べている。
  - 19) これについては荒俣宏編『日本まんが』(1巻、東海大学出版部、2015年、95頁)を参照されたい。
  - 20) 同上、292頁。
  - 21) 前掲「『漫画家・やなせたかし』の履歴書」228-231頁。
  - 22) なお、雑誌『PHP』については宮地正人「資本による価値観の組織化とその歴史」(『天皇制の政治史的研究』校倉書房、1981年)参照。
  - 23) やなせたかし「海彦・山彦」前掲『やなせたかしおとうものがたり』38-39頁。
  - 24) 平林前掲論文、78頁。四方田前掲論文、58頁。
  - 25) 平林前掲論文、79頁。
  - 26) 同上、82頁。四方田前掲論文、64頁。
  - 27) 四方田前掲論文、53頁。また四方田氏は、水木自身が戦場体験と再び向かいあおうとしたのが『総員玉砕せよ!』であったと評価している(61頁)。
  - 28) <https://twitter.com/mizukipro/status/862575800532455424>(Twitter、水木プロダクション)に掲載の1965年前後にかかれた水木しげるの文章の画像より引用(最終閲覧日:2021年9月8日)。
  - 29) 平林前掲論文、80頁。
  - 30) 水木しげる「あとがき」前掲『総員玉砕せよ!』355頁。
  - 31) また前掲「水木しげるの戦争」で、長井は「戦争や兵隊時代の自分を淡々と客観視できるまでに、きっと、それだけ時間が必要だったんでしょねえ」と述べていることは重要だろう。
  - 32) やなせたかし「劣等生的回想」横山隆一編『漫画集団』1巻、四季新書、1955年。
  - 33) やなせたかし「弟」『ぼくと詩と絵と人生と』(前掲『やなせたかし全詩集』631頁)。
  - 34) 終戦から数えて33回忌に当たることが、戦争体験の記録化にとって重要であったことは吉田前掲書(207頁)が指摘している。
  - 35) 少なくとも前掲『アンパンマンの遺書』(69頁)をはじめ、前掲『人生なんて夢だけど』(65頁)、前掲『絶望の隣は希望です!』(77-78頁)、前掲『ぼくは戦争は大きらい』(37-38頁)などには出てくる。そして弟が特攻に志願したということは「おとうと物語」の連載でも出てくるため(前掲『やなせたかしおとうものがたり』37頁)、1970年代半ばから信じていたと考えられる。
  - 36) 門田前掲書、326頁。
  - 37) 同上、187-188頁。
  - 38) 前掲『やなせたかしおとうものがたり』36頁。
  - 39) 前掲「あとがき」357頁。
  - 40) 平林前掲論文、77頁。
  - 41) 同前掲注17。
  - 42) 呉智英と南伸坊の対談での呉の発言(水木しげる著、大泉実成編『水木サン迷言366日』幻冬舎文庫、2010年、244頁、元出典は『ガロ』1993年1月)。